

【共同研究】

親評定による多面的に捉えた児童の協調性と 親の子育てスタイルとの関係¹

登張真稲* 名尾典子** 田村沙織*** 大山智子**** 首藤敏元*****

Multifaceted cooperativeness of children assessed by their parents and its
relationship to parenting styles

Maine TOBARI, Fumiko NAO, Saori TAMURA,
Tomoko OYAMA, Toshimoto SHUTO

An instrument with which parents of schoolchildren can assess their children's cooperative traits and an instrument with which to assess parents' own parenting styles were devised. These instruments were used to survey parents of schoolchildren in first to sixth grade (N=2034). Data were subjected to factor analyses, and the Multifaceted Cooperativeness Scale for Children Assessed by their Parents (MCSCAP) and Parenting Style Scale (PSS) were developed based on those results. The MCSCAP had three subscales: Cooperation, which assesses a child's readiness to cooperate with others; Collaborative Problem-solving, which assesses the tendency to respect others' opinions and to conceive the best solution for both the other person and oneself; and Harmonious Conformity, which assesses the tendency to fall in harmony with others. The PSS had two subscales: Responsive/Sharing and Controlling/Demanding. Scores on the subscales of the MCSCAP were analyzed in 2 x 6 (gender x grade) ANOVA. The main effects of gender and grade were significant for all three subscales. Girls' scores were higher than boys' scores, and the higher the grade, the higher the scores. These effects were most prominent in Collaborative Problem-solving.

Based on the scores for Responsive/Sharing and Controlling/Demanding, parents were classified as having one of four parenting patterns: Authoritarian (both high), Permissive (high Responsive/Sharing, low Controlling/Demanding), Authoritarian (low Responsive/Sharing, high Controlling/Demanding), and Unconcerned (both low). This classification was used to perform one-way ANOVA of scores for Cooperation, Collaborative Problem-solving, and Harmonious Conformity. Results indicated that Authoritarian and Permissive parents had a higher score for Cooperation than Authoritarian parents, which had a higher score than Unconcerned parents. Authoritarian and Permissive parents had a higher score for Collaborative Problem-solving than Authoritarian and Unconcerned parents. Parents with different parenting patterns did not differ significantly in terms of their score for Harmonious Conformity.

Key words : cooperativeness, parenting style, schoolchildren, parents' assessment

* とばり まいね 文教大学人間科学部非常勤講師
** なお ふみこ 文教大学人間科学部
*** たむら さおり あきる野市教育相談所
**** おおやま ともこ 帝京科学大学
***** しゅうとう としもと 埼玉大学教育学部

問題

ヒトは生まれたときから、さまざまな人々とのかわりの中で育ち、生きていく社会的動物である。社会的動物にとっては、他の個体とどのように連携するか、どのように協調しあうかということが、個体にとっても他の個体にとっても社会全体にとってもきわめて重要となる。他者とうまく連携し、互いに協力、協調する傾向を表す協調性という特性は、重要な基本的パーソナリティ因子としてビッグファイブ理論等でも取り上げられている。

一方、協調性の発達に文化が影響を与えているという見方もある。アメリカや西欧諸国の人々は、個人が他者から独立した相互独立的自己観を持つ傾向があるのに対し、我が国をはじめとする東アジアの国々の人々は、人々が相互に調和し依存しあう相互協調的自己観をもつ傾向があり、この自己観を反映して、他者との対立を避け、他者に合わせようとする相互協調性が発達しやすいとされている (Markus & Kitayama, 1991; 高田, 1999)。この相互協調性は、自分を抑え、他者に合わせようとするという点から、受動的な意味合いが強い協調を表す概念であると考えられる。

しかし、「協調」には、「利害の対立する者同士が穏やかに相互間の問題を解決しようとすること」(新村, 2008) という、もう少し積極的な意味を含む定義も示されている。Yeats & Selman (1989) は、対人交渉方略の最も高いレベルでは、自分と他者の双方にとってより良い新たな解決法を探ろうとする協調的 (協同的; collaborative) 対人交渉方略がとられるとした。この内容は、「協調」に含まれる、より積極的な含意と合致している。したがって、協調性という概念は、普遍的な基本的パーソナリティ特性の一次元として捉えることができるとともに、相互協調性に示される受動的な意味合いや、より積極的な協調的対人交渉方略を取る傾向等の概念を意味範囲に含むことが可能であり、そうした多面的な概念として捉えることができると考えられる。

このように協調性を多面的な概念として捉える

見方をもとに、登張・名尾・首藤・大山・木村 (2016a) は、既存の協調性に関する尺度項目を参考にするとともに新たな項目も考案して質問紙を作成し、大学生対象の調査結果をもとに協調的問題解決、調和志向、非協調志向、協力量向の4下位尺度からなる多面的協調性尺度を作成した。協調的問題解決尺度には、協調的対人交渉方略を取る傾向を表す項目と他者の意見を聞くという内容の項目が含まれており、調和志向尺度には、他者に合わせるという受動的な意味合いの項目が含まれている。非協調志向尺度には協調的でない傾向を示す項目が含まれ、協力量向尺度には他者と協力する傾向を示す項目が含まれている。

その後、大学生対象の調査で用いた項目の一部の表現を修正し、高校1-2年生を対象とする調査が行われた。高校生対象の調査でも大学生の結果と同様の4因子が抽出された (登張・首藤・大山・名尾, 2015a)。また、大学生対象の調査に基づいて作成された多面的協調性尺度をもとに、教師が生徒の協調性を評定する項目を含む質問紙も作成され、小学校や中学等の教師106名を対象に調査が行われた (名尾・登張・大山・首藤, 2016a; 登張・名尾・首藤・大山, 2014)。さらに、これらの質問紙をもとに、児童の協調性を親が評定する項目が考案され、小学1-6年生の保護者2034名を対象とする質問紙調査が実施された。

本研究では、この小学生の保護者対象調査の結果をもとに、第1の目的として、小学生の協調性は大学生や高校生の協調性と同様の構造で捉えることができるか、またそうして捉えた小学生の協調性が小学校1年から6年の間にどのように発達するかを検討する。

この質問紙には親が自分の子育てについて答える項目も含まれていた。子育てに関する項目は Baumrind (1967) の養育態度の理論をもとに作成された親の養育態度尺度 (中道・中澤, 2003) 等を参考にして考案された。なお、Baumrind (1967) は、親子の観察と親へのインタビューに基づいて、子どもの社会的特徴をもとに3群に分け、各群の親の特徴を調べた。それによると、社会的コンピテンスが高く安定した児童群 (パターン1) の親は、子どもに対して確固として要求す

るが、温かく、親子のコミュニケーションを大事にする「権威ある (authoritative)」親、精神的に不安定で親和性が低く不満足な児童群 (パターン2) の親は、統制的で距離を置いた、温かくない「権威主義的 (authoritarian)」親、未熟で自己統制と自己信頼が低い児童群 (パターン3) の親は、統制的でなく要求せず、比較的温かい「許容的 (permissive)」親であることが明らかとなった。養育態度については、これ以外にもいくつかの分類があるが、Maccoby と Martin (1983) はこれらをまとめ、子どもに対して厳しく統制し、要求する「統制・要求」と、子どもに対して愛情深くかわわり、子どもの要求に耳を傾ける「応答・受容」の二つの次元を設定したうえで、両方が高い権威ある (互惠的) パターン、統制・要求が高く応答・受容が低い権威主義パターン、統制・要求が低く応答・受容が高い甘やかしパターン、両方低い無関心パターンの4分類を提唱した。養育態度の研究ではこの分類が用いられることが多く、Baumrind (1996) や中道・中澤 (2003) もこの分類を用いている (使われる用語が若干異なる場合もある)。

本研究では、第2の目的として、子育てに関する質問項目への保護者の回答と養育態度についての上記の理論をもとに、親の子育てスタイルについての尺度を作成し、親の子育てスタイルをパターン分けする。そして、小学生の協調性が親の子育てスタイルとどのように関連するかについて検討する。

方法

調査対象 小学校1年から6年までの子どもを持つ保護者2034名 (男性171名、女性1844名、性別不明19名；25から73歳；50歳以下が98.2%；少数の祖父母が含まれていると考えられる) 保護者職業：フルタイム22.3%、パートタイム39.7%、専業主婦30.1%、その他 (自営業等) 5.9% 子どもの性別：男子1004名、女子1026名、性別不明4名

尺度 児童の協調性に関する項目：多面的協調性尺度 (登張他, 2016a) 作成の過程で収集された協調性に関する項目のうち、小学生の協調性を

表すと考えられる項目と、小学生用に表現を変更した項目のほか、協調性のさまざまな側面に関連すると考えられる自己主張、共感性、社会的スキル、視点取得、道徳性等を表す項目を考案して計41項目とした。教師対象の調査で用いた教師が生徒の協調性を評定する項目も参考にした。大学生対象の調査をもとに作成された調和志向尺度の項目の一部は、小学生の評定に用いるには難しいと判断されたため、同調・追従を表す項目も加えた。

子育てに関する項目：親の養育態度尺度 (中道・中澤, 2003)、Family Diagnostic Test (東・柏木・繁多・唐澤, 2002)、TK式幼児用親子関係検査 (品川・品川, 1992) を参考にして、小学生を持つ親が自分の子どもにどのように接しているかを尋ねる17項目を考案した。他の親との関係、PTAや学校への態度、配偶者との関係等を聞く項目も考案して含めている。

回答法：児童の協調性に関する項目については、自分の子どもにどのぐらい当てはまるか、子育てに関する項目については、保護者自身にどのぐらい当てはまるか、「全然当てはまらない」から「よく当てはまる」までの5件法で回答を求めた。

手続き 東京都の公立小学校1校と埼玉県公立小学校5校に、小学1-6年生の保護者への質問紙の配布と回収を依頼した。調査時期は、東京都の小学校が2014年2月、埼玉県の小学校5校が2014年7月である。

結果

1. 親評定・児童用多面的協調性尺度の作成

親が子どもの協調性等を評定する全41項目の内容について再吟味し、協調性のいろいろな側面を表す項目として22項目を選択し、当初総計2034名のうち1734名の保護者のデータを用いて因子分析を行った。大学生対象の調査で用いた最尤法、プロマックス回転を用い、多面的協調性尺度作成の際に採用した4因子解を求めると、大学生対象の調査で抽出された協立志向、協調的問題解決、調和志向に対応する因子と「他者からの依頼」を表す因子が抽出され、非協調志向に対応する因子は

抽出されなかった。そこで、因子数を3に指定すると、協立志向、協調的問題解決、調和志向に対応する3因子が抽出された。3因子が適切と判断し、複数の因子の負荷量が同等となる項目と、高校生の因子分析で当該因子の負荷量がやや低かったり他の因子の負荷量の方が高かったりした項目を除いて15項目を選択し、因子分析を行った(登張・名尾・首藤・大山, 2015b)。

この後、未入力だったデータ(N=300)を加え、総計2034名のデータで因子分析を行うと、1734名のデータを用いた結果とほぼ同様の結果と

なった。2034名のデータの因子分析結果(最尤法、プロマックス回転、15項目、因子数=3)をTable 1に示した。累積寄与率は46.05%であった。第1因子の負荷量が高かったのは、多面的協調性尺度(登張他, 2016)の協立志向尺度に含まれるのと同じ、または類似した3項目のほかに「人と喜びを分かち合える」「集団遊びが上手にできる」の計5項目であった。第2因子の負荷量が高かったのは、協調的問題解決尺度(登張他, 2016a)に含まれるのと同じか類似した項目が多かった。第3因子の負荷量が高かった項目には、調和志向尺

Table 1 親評定・児童用多面的協調性尺度の因子分析

下位尺度名(項目数 α係数)	因子負荷量			
	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
下位尺度項目				
協立志向尺度 (5項目、α=.81)				
みんなで協力して何かをやり遂げるのが好きだ	.78	-.04	.04	.58
人と喜びを分かち合える	.78	-.02	.03	.58
みんなで何かをやるときには進んで協力する	.66	.03	-.03	.46
試合のときなど、チームのために頑張る	.61	.06	-.05	.42
集団遊びが上手にできる	.57	.03	-.05	.35
協調的問題解決尺度 (6項目、α=.81)				
自分と相手のどちらにとっても良い方法を考える	.00	.78	.01	.62
相手が納得するようきちんと説明する	-.05	.76	-.11	.50
自分と相手の意見が違うとき、両方が歩み寄れるような解決案を考える	.01	.75	-.08	.54
どんな人に対しても、なるべく相手の話を聞く	.14	.52	.16	.47
人に迷惑をかけたことに気づいたら謝る	.18	.45	.02	.35
自己主張ばかりして人の話を聞かない (R)	.03	-.41	-.17	.23
調和・同調尺度 (4項目、α=.73)				
人の意見に合わせることが多い	-.02	-.02	.80	.63
まわりの人に合わせすぎる	-.06	-.02	.74	.53
自分と相手の意見が違うとき、相手に従う	.01	-.03	.68	.46
相手のペースに合わせない (R)	-.08	-.18	-.33	.21
	負荷量平方和	4.50	1.74	0.67
	回転後の負荷量平方和	3.77	3.93	2.12
	累積寄与率 (%)	30.02	41.59	46.05
因子間相関	第1因子	1.00		
	第2因子	.68	1.00	
	第3因子	.13	.29	1.00

注) 最尤法 プロマックス回転 因子数=3
 小学1-6年生の保護者2034名のデータ
 R: 逆転項目

度（登張他，2016a）に含まれるのと同じ1項目と、表現を変更した項目、および同調・追従を表す項目（周りの人に合わせすぎる、自分と相手の意見が違うとき、相手に従う）が含まれていた。

この結果をもとに、各因子の負荷量が高い項目の内容から協力的志向尺度、協調的問題解決尺度、調和・同調尺度と命名する3下位尺度からなる親評定・児童用多面的協調性尺度を作成した。 α 係数はそれぞれ.81、.81、.73で、内的整合性は比較的高かった。

2. 子育てスタイル尺度の作成

子育てに関する17項目に対する2034名の保護者の回答について、最尤法の因子分析を行った。因子間に関連があることを想定し、プロマックス回転とした。因子数を2に指定すると、子どもに真摯に向き合い、子どもとの時間を大事にすることを表す因子と、子どもを厳しくしつけようとすることを表す因子が抽出され、因子数を3に指定す

ると、それと同様の2因子に加え、「他の親との協調」を表すと考えられる因子が抽出されたが、その負荷量が高い2項目から尺度を作成すると、内的整合性が.55と低かった。そこで、2因子解を取ることとした（登張・名尾・首藤・大山・田村，2016b）。Table 2には因子数を2に指定し、当該因子の負荷量が.40未満の項目を除いた9項目の因子分析結果を示した。第1因子の負荷量が高かったのは、親が子どもとのコミュニケーションを大事にしていることを表す項目や、親子が時間や活動を共有していることを表す項目などであった。Baumrind（1996）の応答性次元に概ね対応しており、共有という意味合いも強いので、第1因子は応答・共有因子と命名し、負荷量が高い5項目から応答・共有尺度を作成した。応答・共有尺度の α 係数は.66である。第2因子の負荷量が高かった項目は、Baumrind（1967，1996）およびMaccoby & Martin（1983）の統制・要求次元を表していると考えられる。そこで、第2因子を統制・要求

Table 2 子育てスタイル尺度の因子分析

下位尺度名(項目数 α 係数)	因子負荷量		
	第1因子	第2因子	共通性
下位尺度項目			
応答・共有尺度 (5項目、$\alpha=.66$)			
子どもの話をよく聞くようにしている	.69	-.02	.48
子どもと一緒に遊ぶ	.57	-.11	.31
家族団らんの時間を大事にしている	.52	.16	.34
子どもが間違っただけの行動をしたとき、どうしてその行動をしたのか理由を聞き、どうしたらよくなったのかを話し合う	.48	.16	.29
忙しくて子どもをかまっていられないことが多い (R)	-.47	.16	.21
統制・要求尺度 (4項目、$\alpha=.63$)			
子どもが約束を破ったら叱る	.02	.72	.53
子どもが自分のやるべきことをやらないとき「やりなさい」と言う	-.09	.64	.39
子どもは親の言うことをよく聞くべきだと思う	-.03	.47	.22
しつけを厳しくしている	.03	.42	.18
	負荷量平方和	1.76	1.17
	回転後の負荷量平方和	1.59	1.48
	累積寄与率 (%)	19.60	32.64
	因子間相関	第1因子	1.00
		第2因子	.22

注) 最尤法 プロマックス回転 因子数=2
小学1-6年生の保護者2034名のデータ
R: 逆転項目

因子と命名し、負荷量が高い4項目から統制・要求尺度を作成した。統制・要求尺度の α 係数は.63であった。この二つの尺度を合わせた尺度を子育てスタイル尺度と命名した。

3. 親評定・児童用多面的協調性尺度の性差と学年差

名尾・登張・首藤・大山・田村(2016b)は、親評定・児童用多面的協調性下位尺度について、保護者2034名のうち欠損値のない1966名のデータをもとに、性別と学年を要因とする2要因分散分析を行った。それによると、3下位尺度はいずれ

も性別と学年の主効果が有意で、女子が男子より高く、学年が高いほど得点が高くなる傾向がみられた。

本研究では、2014年7月に調査した埼玉県の5校の保護者1563名(男性106名、女性1470名、性別不明17名)についての結果を報告する。Table 3に協立志向尺度の、Table 4に協調的問題解決尺度の、Table 5に調和・同調尺度の男女の学年別平均値と、性別と学年の2要因分散分析の結果を示した。それによると、東京都の小学校の結果も含めた名尾他(2016b)と同様、3尺度とも性別と学年の主効果が有意で、女子が男子より高く、

Table 3 親評定・児童用協立志向尺度の性別学年別平均値(標準偏差)と性別と学年の2要因分散分析

学年 人数	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	計	性別 主効果 F	学年別 主効果 F	交互作用 F
男子 784名	19.05 (3.34)	19.52 (3.34)	19.48 (3.68)	19.22 (3.43)	19.81 (3.60)	20.37 (3.15)	19.56 (3.43)	8.39**	4.07**	1.85
女子 777名	19.14 (2.77)	19.90 (3.29)	20.06 (2.85)	20.63 (3.05)	20.42 (3.20)	20.22 (3.69)	20.07 (3.19)			
計 1561名	19.09 (3.08)	19.71 (3.31)	19.78 (3.28)	19.93 (3.31)	20.11 (3.42)	20.29 (3.44)	19.81 (3.32)			

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

Table 4 親評定・児童用協調的問題解決尺度の性別学年別平均値(標準偏差)と性別と学年の2要因分散分析

学年 人数	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	計	性別 主効果 F	学年別 主効果 F	交互作用 F
男子 784名	19.16 (3.52)	20.09 (4.00)	20.02 (4.16)	20.21 (3.91)	21.07 (3.79)	21.84 (3.92)	20.37 (3.98)	17.43***	13.63***	1.38
女子 773名	19.91 (3.47)	20.31 (3.90)	21.33 (3.66)	21.77 (3.45)	21.85 (3.92)	22.11 (3.89)	21.21 (3.83)			
計 1557名	19.51 (3.53)	20.20 (3.95)	20.71 (3.95)	20.99 (3.76)	21.44 (4.02)	21.98 (3.90)	20.79 (3.93)			

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

Table 5 親評定・児童用調和・同調尺度の性別学年別平均値(標準偏差)と性別と学年の2要因分散分析

学年 人数	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	計	性別 主効果 F	学年別 主効果 F	交互作用 F
男子 784名	12.07 (2.46)	12.17 (2.49)	12.50 (2.74)	12.11 (2.85)	12.53 (2.25)	12.63 (2.60)	12.32 (2.58)	10.99**	2.24*	0.48
女子 779名	12.38 (2.86)	12.45 (2.64)	12.91 (2.50)	12.99 (2.71)	12.95 (2.72)	13.01 (2.64)	12.78 (2.68)			
計 1563名	12.21 (2.65)	12.30 (2.56)	12.72 (2.62)	12.56 (2.81)	12.73 (2.49)	12.82 (2.63)	12.55 (2.64)			

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

学年が高いほど得点が高くなる傾向がみられた。交互作用は有意でなかった。

多重比較を行うと、協力志向は1年生が4-6年生より低く、協調的問題解決は1年生が3-6年生より低く、2年生は5-6年生より低く、3、4年生は6年生より低かった。調和・同調は1年生が6年生より低かった。性別の効果も学年の効果も、協調的問題解決において最も顕著であった。

4. 親評定・児童用多面的協調性尺度と子育てスタイル尺度との関係

応答・共有尺度と統制・要求尺度の平均値は18.43と15.92だが、得点範囲1-5に換算すると、3.69と3.98であり、かなり高いことが明らかとなった。平均値で高低群を分けると、比較的高得点の人も低群に属することになるため、どちらの尺度も[平均値-1標準偏差]を低群、[平均値+1標準偏差]を高群とすることとした。Table 6に、応答・共有尺度と統制・要求尺度の平均値と低群、高群の得点と人数等を示した。

Baumrind (1996)、Maccoby & Martin (1983)、

中道・中澤 (2003) に基づいて、応答・共有高、統制・要求高群を「権威ある (authoritative)」子育てパターン、応答・共有低、統制・要求高群を「権威主義 (authoritarian)」子育てパターン、応答・共有高、統制・要求低群を「許容的 (permissive)」子育てパターン、応答・共有低、統制・要求低群を「関心低」子育てパターンに分類したところ、「権威ある」子育てパターン群は148名、「権威主義的」子育てパターン群は103名、「許容的」子育てパターン群は74名、「関心低」子育てパターン群は142名であった (Table 7)。

子どもの協調性と親の子育てスタイルとの関係を検討するため、協力志向、協調的問題解決、調和・同調尺度の得点について、子育てパターン4分類を要因とする一元配置分散分析を行った (Table 8)。それによると、協力志向と協調的問題解決は群分けの主効果が有意で、協力志向は「権威ある」群と「許容」群が「権威主義」群より高く、「権威主義」群は「関心低」群より高かった。協調的問題解決は、「権威ある」群と「許容」群が「権威主義」群と「関心低」群より

Table 6 応答・共有尺度と統制・要求尺度の平均値 (標準偏差) および低群、高群の得点と人数

尺度	平均値 (標準偏差)	平均値- 1標準偏差	平均値+ 1標準偏差	低群の得点 (人数)	高群の得点 (人数)
応答・共有	18.43 (2.84)	15.59	21.27	16以下 (245名)	21以上 (222名)
統制・要求	15.92 (2.19)	13.73	18.11	14以下 (216名)	18以上 (251名)

Table 7 子育てスタイル4パターンと各群の人数

	応答・共有高	応答・共有低
統制・要求高	権威ある (authoritative) 148名	権威主義的 (authoritarian) 103名
統制・要求低	許容的 (permissive) 74名	関心低 142名

Table 8 子育てパターン4群の協調性下位尺度の平均値と一元配置分散分析

子育てパターン	権威ある	許容的	権威主義的	関心低	群別主効果F
協力志向	21.95	21.01	19.07	17.69	51.14***
協調的問題解決	23.11	22.94	18.91	18.83	48.36***
調和・同調	12.54	12.19	12.33	12.25	0.41

*** $p < .001$

注) 多重比較 協力志向 権威ある、許容的 > 権威主義的 > 関心低
協調的問題解決 権威ある、許容的 > 権威主義的、関心低

高かった。調和・同調は群分け主効果が有意でなく、子育てパターンによる得点の違いはほとんどみられなかった。

子どもの性別、子どもの学年（低学年か高学年か）、保護者の性別、保護者の職業（フルタイム、パートタイム、専業主婦、その他）、保護者の年代（20代、30代、40代、50代以上）によって、子育てパターンに違いがあるかどうかについても χ^2 乗検定を用いて検討した（Table 9）。それによると、子どもの性別と子どもの学年、および保護者の年代による違いは有意でなかった。保護者の性別と保護者の職業による違いは有意で、男性は「権威ある」群が多く、「権威主義」群が少ない傾向がみられた。フルタイムは「許容」群が少なく「関心低」群が多い傾向がみられた。

考察

親が子どもの協調性を多面的に評定する項目と自分の子育てについて答える項目からなる質問紙

を作成し、小学1-6年生の保護者2034名対象の調査を行った。調査データの因子分析結果をもとに、協力志向、協調的問題解決、調和・同調の3下位尺度からなる親評定・児童用多面的協調性尺度と、応答・共有、統制・要求の2下位尺度からなる子育てスタイル尺度が作成された。親評定・児童用多面的協調性尺度は、大学生対象の調査をもとに作成された多面的協調性尺度（登張他, 2016a）と教師が生徒の協調性を評定する項目（名尾他, 2016a；登張他, 2014）を参考にし、児童評定に使えるような項目を選択し、表現を変更して作成した尺度であるが、大学生の分析で抽出されたのと同様の協力志向、協調的問題解決の2因子が抽出された。これは、少なくとも成人である親の目から見ると、児童の協調性はこの2つの側面を含んだ概念として捉えることができるということであろう。調和志向にやや重なる因子も抽出されたが、同調・追従の内容を含む因子となったため、この因子をもとに作成した尺度は調和・同調尺度と命名された。これは、大学生の調査を

Table 9 子どもの性別、学年、保護者の性別、保護者の職業、保護者の年代による子育てパターンの違い

子育てパターン	N	権威ある 148名	許容的 74名	権威主義的 103名	関心低 142名	人数 (%)
						Pearsonの χ^2
子ども性別						1.790
男子	988	81名	41名	55名	68名	
女子	1012	67名	33名	48名	74名	
子ども学年						1.436
1-3年	997	72名	37名	56名	67名	
4-6年	972	70名	35名	46名	75名	
保護者性別						111.024***
男性	169	20名 (11.8)	6名 (3.5)	2名 (1.1)	10名 (5.9)	
女性	1817	128名 (7.0)	68名 (3.7)	101名 (5.5)	131名 (7.2)	
保護者職業						41.639***
フルタイム	450	31名 (6.8)	7名 (1.5)	23名 (5.1)	45名 (10.0)	
パートタイム	797	51名 (6.3)	27名 (3.3)	36名 (4.5)	70名 (8.7)	
専業主婦	608	53名 (8.7)	32名 (5.2)	38名 (6.2)	16名 (2.6)	
その他	29	10名 (8.4)	6名 (5.0)	6名 (5.0)	7名 (5.9)	
保護者年代						9.345
20代	32	2名	1名	1名	1名	
30代	832	53名	28名	50名	69名	
40代	960	77名	37名	43名	59名	
50代以上	54	8名	2名	2名	4名	

*** $p < .001$

もとに作成された調和志向尺度に含まれる項目で、児童用に使える項目が少なく、大学生対象の調査では早い時点で削除した同調・追従を表す項目を質問紙に加えたことが関連している可能性がある。小学生の調和志向的特性には、同調・追従の意味合いが強いととも考えられる。非協調志向因子は抽出されず、非協調志向尺度は作成されなかった。これは、小学生用の表現に変更した際に、否定的表現を肯定的表現に変更した項目があったことなどが関連している可能性があるが、非協調志向は元々、他の3因子のどれとも負の関係にあり、意味合いがややあいまいな因子であった。大学生等の協調性についても協力志向、協調的問題解決、調和志向の3因子で捉え直すことができれば、その方が分かりやすいとも考えられる。

親評定・児童用多面的協調性下位尺度の性別と学年を要因とする2要因分散分析の結果からは、3下位尺度とも性別と学年の主効果が有意で、女子が男子より高く、学年が高いほど高くなる傾向がみられることが明らかとなった。性差も学年差も協調的問題解決において最も顕著であった。協調的問題解決尺度の項目には、協調的対人交渉方略を示す項目も含まれている。この方略は、小学生にとってはかなり高度の対人交渉方略であると考えられるので、協調的問題解決の得点は高学年の方が高く、成長がより速いと想像される女子の方が高いということは十分予想できることである。協力志向と調和・同調は、1年生が低いという傾向がみられた。この特性は、主に小学校での経験や成長によって、徐々に身に着けていく特性なのではないだろうか。そのために、小学校での経験の少ない1年生は十分身に着けていないことが考えられる。

なお、本尺度の項目は、子どもが心のうちに秘める内面を表す項目というよりも、子どもの態度や行動に表れがちで、日ごろから子どもの行動や態度に注意を払っている親なら、観察し、評定できるような項目であると考えられる。しかし、家庭より学校の方が観察しやすい行動もあるし、親によっては、自分の子どもの協調性を正確に評定するのは難しいかもしれない。本尺度の評定が

子どもの実際の協調的態度や行動とどの程度対応しているかについては、日ごろの行動の観察や、教師等の評定、他の測度との対応などを調べ、さらに検討する必要があるであろう。本研究では妥当性検討のための尺度なども含めていない。尺度の妥当性については、さらに検討する必要がある。

本研究で作成された子育てスタイル尺度の応答・共有尺度と統制・要求尺度は、Baumrind (1967, 1996) の提唱する応答次元と統制・要求次元に対応していると考えられるため、Baumrind (1996) やMaccoby & Martin (1983)、中道・中澤 (2003) の応答 (受容) と統制 (要求) の高低に基づく子育てパターン4分類に基づき、保護者を、応答・共有と統制・要求の両方が高い「権威ある」子育てパターンと応答・共有が高く統制・要求が低い「許容的」子育てパターン、応答・共有が低く統制・要求が高い「権威主義的」子育てパターン、両方低い「関心低」子育てパターンのいずれかを示す4群に分類し、親評定・児童用多面的協調性下位尺度の一元配置分散分析を行い、得点の比較を行った。それによると、協力志向は応答・共有が高い「権威ある」群と「許容」群が、応答・共有が低い「権威主義」群より高く、両方低い「関心低」群は「権威主義」群よりもさらに低かった。協調的問題解決は応答・共有が高い「権威ある」群と「許容」群が、応答・共有が低い「権威主義」群と「関心低」群より高かった。子どもにしっかり応答し、子どもとの時間を大事にする子育てスタイルは、子どもの協力志向と協調的問題解決を高めることが示唆された。応答・共有という保護者の態度と、他者と協調し、協力するという態度には共通点があるので、応答・共有の傾向が強い保護者は、子どもに協調のモデルを提供しているとも考えられる。一方、統制・要求の高さと子どもの協調性との関連はそれほど強くないようであったが、応答・共有も統制・要求も低い、つまり子どもへのかかわり方が少ない保護者の子どもは協力志向の傾向が低いことが明らかとなった。なお、Baumrind (1967) では、社会的コンピテンスの高い子どもの親は「権威ある」親であることが明らかにされた。協

調的問題解決や協力志向は社会的コンピテンスの一部と考えられるが、本研究では、「権威ある」子育てパターン群の子どもと「許容的」子育てパターン群の子どもとの間に協調的問題解決と協力志向の得点の違いはみられなかった。これには、本研究のデータでは統制・要求得点が全般的に高かったことが関連している可能性がある。

一方、調和・同調と子育てパターンの間には有意な関係はみられなかった。子どもの調和・同調の傾向には、学校での経験や文化など、家庭以外の要因の影響が強いのかかもしれない。このことについては、今後検討する必要がある。

子どもや、保護者の要因によって子育てパターンに違いがあるか検討すると、子どもの性別と年齢、保護者の年代による違いはみられなかったが、男性保護者と女性保護者の間で違いがあることが明らかとなった。男性保護者は「権威ある」子育てパターンが多く、「権威主義的」子育てパターンが少ない傾向がみられたが、保護者宛てに回答を求めた質問紙に回答してくれた男性は、妻が回答し、自分は回答しなかった男性よりも子育てに熱心で、応答・共有の傾向が強いことが考えられる。両親に回答を求めていたら、異なる傾向がみられた可能性がある。また、子育てパターンには、保護者の職業による違いもみられ、フルタイムは「許容」群が少なく、「関心低」群がやや多い傾向がみられた。フルタイムの保護者の場合、日ごろ忙しく、子どもへの対応が少ないと感じている人がやや多いのかかもしれない。

なお、子育てスタイル尺度作成の際に参考にした中道・中澤（2003）の研究では、父親は統制尺度の得点が母親より低かったが、養育態度の分類（子育てパターン）には、父親と母親との間に有意な違いはみられず、母親の職業の有無による違いもみられなかった。

本研究では、親評定・児童用多面的協調性尺度と子育てスタイル尺度を作成し、これらの尺度を用いて、小学生における多面的に捉えた協調性の発達と、小学生の協調性と親の子育てスタイルとの関係を検討した。多数のデータをもとに比較的項目数の少ない、使いやすい尺度が作成でき、それを用いて小学生の協調性の発達と親の子育てス

タイルとの関連を検討できたことは、本研究の成果と言えるであろう。今後は、尺度の妥当性の検討や、他の方法を用いた本研究結果の確認が必要である。協調性の発達過程や発達の要因についてのより精密な検討も必要である。

引用文献

- 東洋・柏木恵子・繁多進・唐澤真弓（2002）. Family Diagnostic Test. 日本文化科学社.
- Baumrind, D. (1967). Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, **75**, 43-88.
- Baumrind, D. (1996). The discipline controversy revisited. *Family Relations*, **45**, 405-411.
- Maccoby, F.F. & Martin, J.A. (1983). Socialization in the context of family: Parent-child interaction. In F.M. Hetherington (Ed.) & P.H. Mussen (Series Ed.). *Handbook of child psychology Vol.4 Socialization, personality, and social development* (pp. 1-101). New York: Willey.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 中道圭人・中澤潤（2003）. 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部研究紀要, **51**, 173-179.
- 名尾典子・登張真穂・大山智子・首藤敏元（2016a）. 教師が考える児童生徒の協調性 文教大学人間科学部紀要, **37**, 111-118.
- 名尾典子・登張真穂・首藤敏元・大山智子・田村沙織（2016b）. 親の評定による小学生の協調性の発達 日本発達心理学会第27回大会ポスター発表PB-36.
- 新村出（2008）. 広辞苑第6版 岩波書店.
- 品川不二朗・品川孝子（1992）. TK式幼児用親子関係検査 田研出版株式会社.
- 高田利武（1999）. 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 教育心理学研究, **47**, 480-489.

- 登張真稲・名尾典子・首藤敏元・大山智子 (2014). 教師が評定する小中学生の協調性 日本心理学会第78回大会ポスター発表1AM-1-005.
- 登張真稲・首藤敏元・大山智子・名尾典子 (2015a). 多面的協調性尺度の作成—高校生のデータをもとに— 日本教育心理学会第57回総会ポスター発表PG060.
- 登張真稲・名尾典子・首藤敏元・大山智子 (2015b). 親評定・児童用多面的協調性尺度の作成 日本心理学会第79回大会ポスター発表1PM-128.
- 登張真稲・名尾典子・首藤敏元・大山智子・木村あやの (2016a). 多面的協調性尺度の作成と大学生の協調性 文教大学人間科学部紀要, **37**, 151-164.
- 登張真稲・名尾典子・首藤敏元・大山智子・田村沙織 (2016b). 子育てスタイル尺度の作成 日本発達心理学会第27回大会ポスター発表PF-36.
- 登張真稲・名尾典子・首藤敏元・大山智子・田村沙織 (2016c). 児童の協調性と親の子育てスタイルとの関係—親評定尺度を用いた検討— 日本教育心理学会第58回総会ポスター発表PC17.
- Yeates, K.O., & Selman, R.L. (1989). Social competence in the schools: Toward and integrative developmental model for intervention. *Developmental Review*, **9**, 64-100.
- 1 本研究の内容の一部は、日本教育心理学会第58回総会にて発表された(登張・名尾・首藤・大山・田村, 2016c)。

[抄録]

小学生の親が子どもの協調性と親自身の子育てスタイルを評定できる項目を考案し、それらの項目を用いて小学1-6年生の保護者(N=2034)対象の調査を実施した。データの因子分析結果をもとに、親評定・児童用多面的協調性尺度と子育てスタイル尺度を作成した。前者は協力志向、協調的問題解決、調和・同調の3下位尺度からなり、それぞれ他者と協力しようとする傾向、他者の意見を尊重し自分と相手にとってより良い解決策を考えようとする傾向、調和的に他者に従う傾向を測定する。後者は応答・共有、統制・抑制の2下位尺度からなる。親評定・児童用多面的協調性下位尺度の得点について、性別と学年を要因とする2要因分散分析を行った。それによると、どの尺度も性別と学年の主効果が有意で、女子が男子より高く、学年が高いほど得点が高い傾向がみられた。その効果は協調的問題解決で最も顕著であった。

応答・共有尺度と統制・要求尺度の得点をもとに、親の子育てパターンを、両尺度の得点が高い権威ある群、応答・共有が高く、統制・要求が低い許容群、応答・共有が低く統制・要求が高い権威主義群、両尺度の得点が高い関心低群の4群に分類し、協力志向、協調的問題解決、調和・同調の3尺度の得点について、子育てパターンを要因とする一元配置分散分析を行った。それによると、協力志向の得点は権威ある群と許容群が権威主義群より高く、権威主義群は関心低群より高かった。協調的問題解決尺度の得点は、権威ある群と許容群が権威主義群と関心低群より高かった。調和・同調尺度と子育てパターンの間には有意な関係はみられなかった。
